

外国語教育における人工語の導入について

畠山, 勝彦

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

77

(開始ページ / Start Page)

163

(終了ページ / End Page)

170

(発行年 / Year)

1991-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004976>

外国語教育における人工語の導入について¹⁾

島山勝彦

本稿では、外国語教育を有効にする上で、ある種の人工語の導入によって生ずると考えられる効果について論ずる。

現在の大学における外国語教育は、中学・高校における英語学習を基盤としての英語教育の継続と第2外国語であるフランス語・ドイツ語・スペイン語・ロシア語・中国語・韓国語などの中のいずれかの言語を学習する事から成り立っている。日本人が外国語習得においてあまり成果をあげていないのはよく知られた事実であるが、特に大学における第2外国語の学習の場合、その動機があまりはっきりしない場合が多く、学習範囲の広さのわりには時間数が少ないという問題や、学習者が学習開始以前に予想した難易度と学習者個人にとっての実際の難易度との差などのせいで、学習の継続がうまくいっていない場合が多い。個人差もあることだが、一般に大学生にとっては、第2外国語は悩みの種であるといつてよい。

本来、ひとつの外国語を習得すればふたつめは、ずっと短い期間で学習可能であると一般に言われている事を考えれば、大学における第2外国語の学習時間は決して無理のあるものではない筈である。にもかかわらずそれがうまくいっていないというのはどのような理由によるのであろうか。もっともふたつめの言語の習得とは言ってもそれはふつう同系の言語の場合について言われていることであって、別の系統の言語についてはあまり意見が出されることはない。そしてまたこれは第1外国語の習得がうまく行なわれた場合を前提としているのであって、うまく行なわれていない場合は、第2外国語の場合も、発音や綴字と発音の関係の影響もあるがそれほどうまくゆくとは考えられない。

外国語学習の到達度の評価の方法はいくつかあるわけだが、自分の語学力というのは実際には自分で評価しているのがふつうである。大学の定期試験で自分の力を判断している学生はいないであろう。この評価は主観的なものである

から、冷静な判断を下す者の中にはたとえかなり上級の英語の資格試験に合格している場合でも自分には会話能力がない事をはっきり認識している者もいるし、英語はできなかつたけれどもスペイン語を勉強した時にはすぐできるようになったと発言するような、どのレベルに判断の基準をおいているのかわからない学習者もいる。英語では中学2年の教科書も発音できなかったが、それに相当するレベルのスペイン語の場合は発音できたという程度で、そのレベルで学習が停止してしまった場合でもそのように発言する者もいるのである。“どのレベルまで”という事をつねに考慮に入れてこの問題について語らなくてはならない。

英語と同系の第2外国語を学習する場合でも問題になってくるのは、学習者の側に、同系とはどのような事かという認識があまりないという事である。これは英語を学習した時に、英語という言葉は、言語形式としてどのような特徴を備えているのかという認識が育たなかった事に原因がある。高校の学習のかなりの部分を占めていると考えられる英文和訳をとおして、両言語の構造の違いを認識できる筈と一般には思われているが、実際は明確な形で意識されている事はまれで、数多くの経験を通してのぼんやりとした印象を得ただけであるのが普通である。それから文法形式についての理解なしに、多くの事柄をつめ込む事に終始してしまったせい、言語学習とはその言語の骨子をなす規則について学ぶことではなくその言語の規則に付随している例外について知る事であるというように誤解してしまう傾向があり、英語でやったような膨大な量の暗記を、第2外国語でもやらなければならないと思っている事が多い。そして英語の文法についての理解がないので、例えばドイツ語の学習をする際に自分が今、英語ではどのような部分に相当する事をやっているのかという事に対する理解がない。暗記する項目が多いとすっかり言語の全体像の中でのその部分の役割を無視してしまう形で、その暗記だけに取り組むことになる。このような理解と学習の仕方では長期の休みの後にはすっかり以前の学習範囲を忘れてしまうことなど不思議ではない。この現象は英語の習得にかなり成功している学生にも言える事である。これは自分がなぜかなり複雑な事を英語で言えるようになっているかという事に関する理解がない場合に起こり得る事で、自分の英語運用能力は“単語とイディオム”の力に依存していると信じている学習者は、骨組みから入らず、材料集めから入っていくのでなかなか第1外国語を習得したレベルまで到達しない。一方、言語構造に理解のある者は、すぐに“あ

とは単語だけ”というレベルに到達できるのである。大学での第2外国語学習者の中には、自分で外国語を操作運用したという実感を持っていない者が多い。年齢的に言っても見通しのない学習というものは、個人での練習という部分がかかなり重要な外国語学習の場合、苦痛の多いものであろう。

一般に我々学習者は“コンパクトな文法”というものを見た経験がない。それはいわゆる外国語の入門書や参考書が学習者の多方面の便宜を考えて各々の項目に関してかなりくわしい説明と例外的知識の提供をしているからで、そのような部分をすべて取りのぞいたらその言語は一体どの程度の操作で、一般に必要とされる様々な表現形式が構成可能なのかという事が示されていないからである。学習者の側では各々の現象をどの程度覚える必要があるのかという事が実際に求められるのだが。

上で言語学習における不規則・例外の問題について述べたが、この不規則・例外をいっさい取りのぞきたいいわゆる人工語として知られているものにエスペラント語がある。この言語は誰にでもかんたんに学べて国際間での交流に役立つ言語とされているが、この言語の学習がまた逆に英語の学習に役立つという報告がある²⁾。多くの言語が存在するゆえに起こる問題を少しでも少なくしようと生みだされた言語が自然言語である英語の学習に役立ってしまうのは皮肉なものであるが、ヨーロッパの言語のエッセンスとでも言ってよいエスペラント語であるのだからこのような事は当然予想できる。ただこのような報告は、ヨーロッパ諸語を母語とする人がエスペラント語を学習した場合とそうでない人が学習した場合とで分けて考えなければならない。フランス語・スペイン語・イタリア語・ドイツ語などを母語とする者にとっては、母語の中にすでにエスペラント語を構成するに至った要素が含まれているわけで、いわば簡略版の言語を学習することになるのだが、非ヨーロッパ人にとっては、例えば英語を学習するのと並列させて考える事の可能な言語なのである。もっともその扱いはずっと楽になるのだが。

もし本当にエスペラント語が短期間で学習可能なら、それを母体として次の言語を学習する際の助けとする方法は有効性が高いと考えられる。このように言うと、エスペラント語を習った時の“慣れ”で第2外国語を学ぼうとしていると考えられてしまうかもしれないが、もし実際そのような事が起こったならば、以前と同じという事になってしまうのである。そこで学ばれた文法上の操

作というものが意識されない以上、進歩がないのである。ヨーロッパ人の場合はその操作がかなり似ているので“無意識”に近いレベルでもやれるのである（この操作というのは表層での具体的操作を言っているのであって抽象度の高いレベルでの話ではない）。この操作を意識するという問題は重要で、別にエスペラント語という具体的な言語をとおしてでなくともかまわないのであるが、エスペラント語がヨーロッパ諸語のエッセンスであるという事を考えると大学でのドイツ語・フランス語・スペイン語・ロシア語などの学習の際には非常に便利であろう。ただし、外国語学習に大きな苦痛を感じる者にとってはどんな言語でも苦痛であろうから、もっと簡略的な言語（と呼べそうなもの）ならなお良いであろう。

私がかねがね大学での外国語学習者について気の毒に思っている事は、学習者が選択外国語についての知識を学習開始前にほとんど持っていないという事である。大学受験前に入学後の選択外国語についての届けをすでに出している事が多い。そして、かなりの学生が「こんなに〇〇語が難しいと知っていたら△△語を選ぶべきだった」というような事を口にするのを聞くが、その時私は「どうして△△語の方がやさしいと知っているのだ？」ときくことにしている。結局学習者は現在学習している言語と同じように、選ぶべきだったと後悔している言語についてもよく知らないことが多い。「なんとなく」現在学習中の言語に不満をもらしているだけなのである。このような問題に関しては、大学で学ぶ言語の事ぐらいいは高校時代に調べておくべきである、という意見も聞かれるが、これは無理な話であると思う。まず第一に、特定の外国語をとおして何かを達成しようという目標を持っている学生は多いとはいえない。第二に、言語に興味を持っている学生にとっても、多くの言語にひとりであたってみるよりは、外国語への案内書があった方が便利なのである。そこでどのような案内が必要かという事になるのだが、私は非常に抽象度の高い人工言語を用意するのが良いと思う。3言語以上の対照には具体性は邪魔になる可能性が高い。

人工語の代表格であるエスペラント語は16の原則ででき上っていると言われているが、そのような原則の中にある非常に重要な部分である、名詞の語尾は -o であるとか形容詞の語尾は -a、派生副詞は -e、動詞の定形語尾は -is、-as、-os というような事を知るとい事は役に立つように見えて実は複雑な自然言語を分析して行く際の強力なトレーニングにはならない。エスペラント語の骨

子となっている文法によって学習者が自然言語へ応用できる範囲は単文のレベルでの解釈までであると思われる。その理由は英語学習における現在の状況に求められる。英語における文型というものは、英語学習において決定的に重要なのであるが、これがあまり学習者に意識されていないのは、5文型の骨子を取り扱った部分の処理法が学習者の中に確立されていないからであろう。主体となる節とそれ以外の節や句との関係を経験や参考書の例文とのパターンマッチングをとおして確定する方法は偶然の幸運による解釈を求める立場であり、あまり向上は望めないものである。

このような学習者が預く句とか節での名詞類、副詞類の区別は学習者が経験をとおして学んでいくべきものではない。文の構成の中で、名詞類、副詞類がどのような形式で構成されるか最初からもっと高次元で明示する必要がある。限定された要素と操作でどのように表現が作成されるかを示し、各々の要素の中で、個々の言語はどのようなふるまいをするのか先に示す必要がある。本来そのような操作の表示が学習の前段階で必要である筈のいわゆる文法の教科書というものは、この“ふるまい”の部分ならべたものである事が普通なので全体像が見えてこないようにできていることが多い。この前段階を示すことは教師の仕事であり、学習が始まった後も偶然によらない明確な分析法の指導が必要とされるが、このようなものはやはり、教師に出会う前に学ぶ側が知っておいた方が便利であり、また難しいテキストで解析が困難な状況におちいった場合には常に身近にあった方が良いものなのである。実際はこれ以前の理解度の学生も多いので、これらの操作以前の段階から解説する必要がある。

日本人の日常の言語生活からはどうしても文が、主部と述部に分かれるという事を自然に理解することは難しい。省略に満ちた日常会話から述語動詞の役割に思いあたることはまずないであろう。自分の授業での経験からもこのことはよくわかる。

学生には語と文の違いを意識していない者がかなりいる。それゆえ定形動詞とそれ以外の動詞から派生した形式との機能上の区別がつかない。短い文の場合は本当に単語の知識を背景としたいいわゆるフィーリングというもので訳しているようである。比較的長い文の場合は、参考書の例文とのパターンマッチングによるという事になるが、私が学生に直接きいたところでは、学生たちは、例えば英語の参考書の中で構文、重要表現、慣用表現と分類されているものが主として、5文型、すなわち名詞類と述語動詞から構成されている文の中核に

入れない副詞類に入り、それが句の形や節の形で整理されている事を知らない場合が多い。副詞類であるからすべて似たような日本語の語尾で訳されている事にも気がついていない場合が多い。このような不経済な学習経験をそのまま第2外国語の学習に持ち込むことは不幸な事である。このような事をさけるためにぜひともある種の簡易言語が必要なのである。少なくともヨーロッパの諸言語の学習のためには、英語の学習を背景としたある種の人工的中間言語の作成が必要である。

それはまず文の中核となるいわゆる述語動詞とそれに関係してくる名詞類の問題を明示するだけでなく、副詞類をつけ加えたやや拡大された文の処理法についても明示するものでなければならない。また同時に英語に存在するある現象を別の言語ではどのように実現しようとしているかを示すものであるべきである。もっとも英語に存在するある現象といってもそれは、文を構成する基本的項目が中心となるべきで、多くの事について最初から語ると例外を多く学ぶ方法になってしまう。

文の構成は、述語動詞と名詞類（形容詞類も含めて）、そして副詞類から成り立つのであるから、各々について英語をモデルに対照させる方法が良いと考えられる。

そのモデルには次のような事が含まれているべきである。

- (1) 述語動詞の果たす役割を明確にし、述語動詞と動詞から派生した他の要素の機能を区別する。
- (2) 名詞類が一般に取り得る形を形式化する。
- (3) 名詞類と共に現われる形容詞類についての形式化を行なう。
- (4) 副詞類について取り得る形を形式化する。

(1)の述語動詞の取り得る形とそれ以外の派生した形式を外形的にわかるようにし、述語動詞以外のものが文の中で果たす役割が図式化されるべきである。語学学習の初歩において分詞や不定詞や動詞から派生した名詞についてその外形と役割を認識する事が必要である。

(2)の名詞類では、本来の名詞や名詞句ならびに定形動詞の入っている名詞節、そして動詞から派生した名詞などについてその外形を示すことが必要である。主節と従属節との違いを示すマーカーとそのマーカーの識別法はぜひとも最初に学ぶ必要がある。

(3)の形容詞類ではその外形と名詞への結合の仕方を学ぶ必要があるが、特に重要なのは、名詞句・名詞節が形容詞類を加えてどこで構成要素として区切れるかという事を識別する方法を学ぶことである。

(4)の副詞類は英語の学習において最も困難であった部分で、副詞一語であった場合と、前置詞句であった場合と、副詞節であった場合とで、学習者の中に関連性があまり生まれてこなかったところである。副詞一語の場合は文全体にかかる副詞か動詞だけにかかる副詞かという事で、前置詞句の場合は何の疑問もなくイディオムという暗記項目ということで、副詞節の場合は解釈に必要な構文集の中のものということで別々にとらえられていて、またこれらの範囲がかなり広いものなので、5文型の意義をぼんやりとさせてしまうほどのものでもあるからだ。ひどい学習者の場合は副詞節の中に5文型の要素が入っていることさえ意識しない。名詞節に関する理解に比べて大きくおとる分野である。

例えば、

$$\begin{array}{l} \text{I know } [\text{that } s' + v']. \\ \text{S} \quad \text{V} \quad \text{O}^{+a} \end{array}$$

という形でのOに対しては直観的理解を持っていても、

However hard s' + v', S + V.

の副詞節部分には、辞書や参考書で学んだ訳をそのままあてているのが普通である。このようなことでは、第2、第3の外国語の場合も英語なみの参考書と辞書が用意されていなくてはこのような人たちには向上できる可能性がない。このような事に関しては日本語を無理やりあてはめての副詞節というものを認識させるトレーニングが必要である。

また(1)の述語動詞については、述語動詞そのものは時制がはっきりしているので問題はないが、それ以外の動詞から派生した名詞類および副詞類については時間的な指向性を示す必要がある。このことに関する理解なしに学習しているテキストの意味を考えることは危険である。

名詞類に関することでも英語における語の連続である

$$\left(\frac{\text{The book}}{\text{名詞句}} \quad \frac{\text{I}}{\text{名詞}} \quad \frac{\text{read}}{\text{動}} \right) \quad \frac{\text{V}}{\text{動}} \dots\dots\dots$$

という表現が最初の [] の形で名詞節を形成するという事と、ドイツ語で

[名詞句] [名詞句] 動

という形がきたら違う機能を持つものが形成されるという事を説明できるもの

でなければならない。例えばこのようなモデルでドイツ語の定冠詞・不定冠詞の一覧表の意味を初期の学習からの段階から学習者に納得させることは、現在の状況では必要なことである。

このような事が理解されてはじめて、第2外国語の学習プランについて学習者自身ははっきりとした自覚を持つことができるのである。教科書の目次に並べられている項目が何を意味するのか、またその順序が何を意味するのかが理解できていないまま学習を始めることは危険である。また、教科書の配列も学習者の実情に合わせて大幅に変えられるべきであると思う。

注

- 1) Plansprache, Planned language については Detlev Blanke 参照
- 2) 調査については「 에스ベラントの話」 p. 84~85 参照

参 考 文 献

エスベラント基礎 1,500 語 大学書林

エスベラントの話 三宅史平著 大学書林

The Artificial Language Movement, Andrew Large, Blackwell

Internationale Plansprachen, 1985 Detlev Blanke, Akademie-Verlag

Interlinguistics, Mouton de Gruyter